

—巻頭エッセイ—

卵物語

野田 徹郎¹⁾

N国のお話です。卵はこれまでずっと固い殻の中にありました。中味は殻にしっかり守られていましたが、一方、その中で身動きがままならないでいました。卵は、中心に黄身があり、白身が取り巻いていました。卵が生まれて百有余年の間に、味や栄養を蓄え、卵は一回り大きくなりました。卵はいろんな料理に使える美味しい食材に成長したのです。しかし、卵はショーケースに並んでいるだけで、卵を買うかどうか、どうやって食べるかは、お客次第でした。

時は移り、飽食の時代となりました。お客はぜいたくになった一方怠惰になり、自分で料理を作ることがおっくうになりました。卵の料理のしかたを知らない若者も増えました。卵が美味しい栄養のある食材であるという認識が薄れてきました。卵が無くなることはありませんが、このままでは、スーパーマーケットの隅に追いやられ、細々と売られる境遇が待ち受けています。卵はもっと使われてもよい素晴らしい食材です。

卵は、自分が優れた食材であることに自信を持つようと考えました。卵のつくりは変わらないのですが、殻に閉じこもってじっと買われるのを待つのではなく、殻を割ってどんな料理に使えるかを自ら示すことにしました。卵だけを使った料理だけでなく、ほかの食材も組み合わせたレシピを工夫し、卵料理のレパートリーを増やし、お薦めの料理を決めました。卵料理に詳しい人の批評も採り入れました。卵を使った料理の素晴らしさを知った人々は、卵の価値を評価し、大いに利用するようになりました。人の料理の好みもいろいろ変わりましたが、その幾つかには卵が主役として、または大事な材料として使われるようになりました。

買われるのを待つ卵から、買う気を起こさせる卵に生まれ変わることで、卵は目玉商品として充実した日々を過ごせるようになりましたとさ。

N国:日本
卵:地質調査所
固い殻:工技院の研究所としての枠組み
守られている:国の法, 組織, 制度の枠内に保護されている
身動きがままならない:枠内にあることによる不自由さ
黄身:基幹研究
白身:応用研究
味:研究能力
栄養:情報
料理:ニーズ
美味しい食材:利用価値の高い優れた分野
ショーケース:国立研究所群
卵を買う, 食べる:地球科学を採り入れる, 活用する
お客:社会, 国民
時が移る:20世紀から21世紀への経過
飽食の時代:いろいろなものや技術が溢れている時代
ぜいたく:ニーズの多様化・高度化
怠惰になる:出来合いのもので済まし, 技術開発に目を向けなくなった状態
料理を作る:自分で応用を工夫しニーズに対応する
若者:各界の最近発達しつつある部分
スーパーマーケット:産業技術総合研究所
細々と売られる境遇:産総研の一部ではあるがぱっとしない状態
卵のつくり:地球科学研究の基本構成
殻を割り自ら示す:自律的に活動し存在価値をアピールする
卵だけを使った料理:地球科学分野だけのニーズ対応
ほかの食材も組み合わせたレシピ:他分野と組み合わせたニーズ対応のしかた
レパートリーを増やす:応用面を多様化する
お薦めの料理:重点ミッション
卵料理に詳しい人の批評:専門家による外部評価
料理の好みがあるいろいろ変わる:ニーズの変遷
目玉商品:産総研の中の重要な研究ユニット

いよいよ行政改革による組織見直しの実行のときを迎え、地質調査所も独立行政法人産業技術総合研究所の中の幾つかの研究ユニットに分散して位置付けられることになっている。こんなとき、組織や制度が変わることによる不安や悲観に陥りがちである。確かに、楽観は許されないが、かと言って不平を述べているだけでは時流に押し流されてしまうであろう。ここは、むしろ自己改革の機会ととらえ、積極的に自らの道を切り開いていくべきと考える。

1) 地質調査所 地震地質部長

キーワード:独立行政法人, 産業技術総合研究所, 地質調査所, 地球科学